

第20回 日本エイズ学会速報

通算第 2 号

発行：2006年12月1日（金曜）午後5時

編集：第20回日本エイズ学会学術集会 広報部

Living Together
ネットワークを広げ真の連携を創ろう

基礎医学分野の「いま」 新薬剤、ワクチン開発 英知を集め一層の努力を 定例プレスブリーフィング・第2日



ブリーフィングする山本直樹委員長。奥は司会の根岸昌功医師

定例ブリーフィングの第2日は正午から、プログラム委員長の山本直樹・国立感染症研究所エイズ研究センター長が、基礎医学の分野について、学術集会での見どころを紹介した。

●新薬剤は宿主（人間）側の因子に注目して開発

冒頭、山本委員長は初日のシンポジウムに触れ、ウイルス粒子形成の鍵を握るgag蛋白に焦点をあてて、海外の一線の研究者らとともにセッションを行なったことを紹介した。

つづいて薬剤開発については現在、HIV増殖を阻止するための新たな攻略点として、宿主（人間）側の因子に注目が集まっていることを紹介した。HIVはそれ自体としては生きられず、かならず宿主の細胞にとりついて増殖しなければならない。現在、ウイルスの複製を阻害する薬剤はいろいろ開発されているが、HIVは変化が激しく薬剤への耐性を発生させやすい。それに対し、宿主側は変化しにくい。ウイルスが宿主の細胞に取りつくさい必要とされる宿主側の因子が働かないようにすることができれば、ウイルス側の変異に影響を受けることなく増殖を抑えられるため、耐性の問題を解消できる。

山本委員長は、「この病気はウイルスが増えてなんぼのものなので、ウイルスを完全に排除できないにしても、増やさないようにするにはどうするか。今後も増殖を阻害するさまざまな因子が見つけだされていくだろう。リビング・トゥゲザーは社会的な面だけでなく、基礎医学の部分でも、ウイルスと宿主である人間との共生という意味で重要な課題となるだろう」と述べた。

●世界の連携でワクチンの開発を

もう一つの大きなテーマとして、ワクチン開発についても触れた。ワクチンについてはサルを使って研究を進めているハーバード大学霊長類研究所のポール・ジョンソン氏らが参加して、明日

（2日）、シンポジウムがもたれる。HIVの多彩さにたいして、これを一種類の免疫源で中和させるにはどうするか、その中和抗体をどのようなベクター（運搬役）に乗せて人に投与するのか、幅広い検討が行なわれる。

記者側からは、ワクチン開発などは費用や実験の面で、日本の研究者には手に余るのではないかと、との懸念も出された。これに答えて山本委員長は、「薬剤開発において日本の研究者は大きな貢献をしている。ワクチンに関しても日本が貢献できる研究は少なくない。エイズワクチンはアメリカといえども一企業、一国のレベルで開発は不可能であり、全世界的な連携で取り組まなければならない。日本の研究者は十分、その一翼を担っている」と強調した。

最終日の2日は、正午から704号室で、臨床医学の分野から岩本愛吉・東京大学医科学研究所教授（日本エイズ学会理事長）が出席してブリーフィングする予定。

日本エイズ学会 総会・評議員会開催 ザマニさん、吉野さんに奨励賞 来年は広島で開催

日本エイズ学会の総会・評議員会が1日午後、開かれ、第7回日本エイズ学会ECCメモリアルエイズ研究奨励賞が「イラン国の薬物使用者のHIV感染や行動の実態とハームリダクションの評価に関する社会疫学的研究」を発表したサマン・ザマニさん（京都大学）、「HIV/AIDSワクチン開発の基礎的研究および日本における母子感染の臨床的・疫学的研究」を発表した吉野直人さん（岩手医科大学）に贈られた。また、第21回日本エイズ学会学術集会・総会の高田昇会長（広島大学）から、来年のメインテーマ「Step Up 情報・教育」が紹介された。

広島に、来んさい！

第21回学術集会・総会長ごあいさつ
広島大学病院 輸血部 高田 昇

第21回日本エイズ学会学術集会・総会の会長を指名されました広島大学病院輸血部の高田 昇です。30才代の前半に血友病の患者さんを診ていたために、この病気に直面しました。目の前のできごとが、何であるのか、何をすればよいのか、まったくわからない状態で、患者さんた



高田 昇さん

ちと歩んできました。

その頃から正しい情報が欲しい、それを仲間や後輩に伝えたい、ということが染みつきました。それでメインテーマを「Step Up 情報・教育」といたしました。

会期は2007年11月28～30日、会場は平和記念公園の中にある広島国際会議場です。広島のレストランは少し早く閉まりますので、毎日のプログラムは午後7時には終わるように努めます。この時期、広島は牡蠣の季節です。お酒が好きな方には清酒、そしてお好み焼きが待っています。「来んさい。必ず広島に来んさい！」

記念シンポジウム

「エイズの中長期戦略をいかにつくるのか」

——学会の新たな展望切り開く

人類がエイズという病気の存在を認識するようになって25年。わが国で日本エイズ学会の前身であるエイズ研究会が発足してからも20年。この間の経験と知識の蓄積を生かし、HIV/エイズ対策の新たな展望を切り開くことを目指し、第20回日本エイズ学会学術集会初日の11月30日、日本教育会館ホールで、記念シンポジウム「エイズの中長期戦略をいかにつくるのか」が午後1時20分から2時間にわたって開かれた。

NHK解説委員の飯野奈津子、今回の学術集会の会長である池上千寿子の両氏の司会で進められたシンポジウムではまず、近藤正晃ジェームス氏（日本医療政策機構）が世論調査の結果をもとに、生活全般の中でも国民が最も大きな関心を持っているのは、医療・年金であり、医療に関しては治療に対する満足度は高いが、政策への国民参加という点では満足度が非常に低いことが示された。近藤氏はこうした結果から、国民が求めている医療の実現には患者参加の医療体制作りが大切であることを指摘した。

生命倫理の研究者であり、HIV/エイズ分野のNGOでの活動歴も長い樽井正義氏（慶応大学文学部）は今年6月の国連エイズ対策レビュー総会で採択された政治宣言について報告した。日本も含む国連全加盟国の賛成で採択された宣言には、2010年までに、予

防、治療、ケア、支援への普遍的アクセスの実現を目指すこと、そのための各国政策を2006年末までに策定すること、政策の策定、実施、評価には市民社会の全面的参画が必要不可欠であることなどが盛り込まれているという。

かつて厚生省でエイズをはじめとする感染症対策に携わってきた伊藤雅治氏（全国社会保険協会連合会）は、1980年代後半のエイズ予防法策定当時を振り返り、HIV陽性者などエイズの流行の当事者が予防法案には反対だったが、感染症新法（感染症法）に基づく予防指針作成（1999年、2005年に改定）ではHIV陽性者も作成のプロセスに参画したことに言及した。医療政策において患者の視点、患者の意見の重要性が認識されるようになっている最近の趨勢を示す事例として注目された。

東京都立駒込病院で長くHIV/エイズ診療を続けてきた根岸昌功氏は患者が一部医療機関に集中している現状について、医療の質の格差によるものと述べ、「医療の質を向上させるには医療技術、総合的ケア、陽性者への理解と共感、医療の継続性、当事者参画が不可欠である」としたうえで、これらを保障する政策を求めた。

日本HIV陽性者ネットワーク（JaNP+）代表の長谷川博史氏は、HIV/エイズ分野における政策参画への途は血友病患者によって拓かれたこと、患者本位の医療、包括的医療のためには、当事者の政策参画とコミュニティの資源の活用が必要であることを強調した。

また、日本エイズ学会理事長の岩本愛吉氏（東京大学医科学研究所）は「さまざまな分野の会員が政策を十分に議論しあい、理

解を深め、それぞれの立場から行動することが望まれる」と語り、「その場を学会として保証したい」との意欲を示した。

今回のシンポジウムは、保健医療・社会保障分野でわが国を代表する放送ジャーナリストである飯野氏、学術集会の会長であり、コミュニティに基盤を置いて予防・支援活動を続けてきた池上氏の2人が司会となり、幅広い分野からの

報告者によって横断的かつ多様な意見が交わされた。もちろん1回のシンポジウムで特効薬的な解決策が打ち出されるような課題ではないが、そうした中でも、理事長自身が積極的に発言の場に立つなど、わが国のHIV/エイズにかかわる唯一の専門家集団としての日本エイズ学会が「日本のHIV/エイズ政策の中長期戦略」について重要な役割を担う意思を示した意義は大きく、学会の今後の活動に期待を抱かせるものとなった。（宮田一雄）



壇上の近藤正晃ジェームス氏、樽井正義氏、伊藤雅治氏、根岸昌功氏、長谷川博史氏、岩本愛吉氏。手前は司会の飯野奈津子氏と池上千寿子氏

初日の受付数、936名！

第20回学術集会への関心は高く、主催者がわの予想を上回る参加があった。2日目、3日目も各会場で刺激的な発表や活発な討議がくり広げられるだろう、と事務局は明るい展望に包まれていた。

訂正

「速報」第1号の発行日が12月1日になっていました。正しくは11月30日です。